

本田吉馬宛我妻榮書簡

1 資料

- (1) 作成 大正4年(1915)8～9月頃 我妻榮先生18歳 東京の第一高等学校在学中 米沢帰省中に書いた手紙
- (2) 形態 原資料は巻紙(縦18cm×横235cm)に書いて、幅7cmに折り畳んでいる。
- (3) 所蔵 我妻榮記念館(令和5年3月 本田吉馬氏ご子息貞夫氏から寄贈)
- (4) 宛先 本田吉馬氏(後の米沢市議会議員) 山形県立米沢中学校(現県立米沢興譲館高校)で1909年(明治42年)から1914年(大正3年)の5年間過ごした同級生で郷里の生涯の親友。
- (5) 手紙の概要

ご無沙汰のお詫び。人の出会いと別れはどうすることもできない。貴兄と離れて過ごしているが深く君を思っている。君も思い出の一部に私を入れてくださっていると信じている。君は禅の修養をしていると聞き、君の努力は偉大である。人世の幸福は理想に向かって一歩ずつ近づく努力の営みである。郷里や母校のために奮闘努力をしてそれぞれ未来の成功を期そう。

——吉馬氏を心友と呼び、変わらぬ友情を誓い共に将来の理想を成就しようとする榮青年の真摯で熱き思いが伝わる手紙である。——

- ## 2 展示
- レプリカを額装し、我妻榮記念館壁面に掲示。令和5年9月29日の特別展から、常設展示。



- ## 3 翻刻文・現代語訳 裏面

本田吉馬宛我妻榮書簡

〔翻刻〕

〔現代語訳〕

拝啓
時下天候定まらず、貴兄には
悪しき時に候へとも、枚々努力
なされ、事とお察し申上候。小生
相変らず元気に遊び暮し居り候
何時かはお訪ね致し、親しく
お話を致すべくと存じ居り申候へども
始終御無音に打ち過ぎ候段、誠に
お申訳も無之、ひたすら貴兄の
御海容を願ふ次第に御座候。
今度も遂に其機会を得ざるに
復々上京の日も近づき申候間
お申訳を一通呈す次第
に御座候。
共に話し共に語りしも、思えば早や
一年半の昔と相成り申候。思ふに
小学の友と申し、中学の友と云い
総て衆人、世の行路を進む
旅人の奇しき縁の為に相会
せしものにして、其運命の異なるに
つれ其目的の同じからざるにつれ
四分五裂、東西し或いは
北し南して遂に亦過去の
追憶の外に何等の残るものなきに
至るべきものに御座候。
然り五尺の肉躰は萬人に
異なる境遇運命に支配せられ
て萬里の遠きに隔てらるゝは
実に如何ともなすを得ざる事に
候へとも、人間の精神的半面は
決して、如上の事情の下に
全々支配し盡さるゝものには候はず
冷酷なる境遇の鉄槌も無情
なる運命の腕も肉體を離れ
たる靈の上には何等のオーソリチー
を値せざるものに候はずや
かくして千差萬別の境遇の
下にある人間をして強き一國
に結合せしめ、たとひ一日半日の友
をしても深き永久の精神の交り続け
しめ、是処に於て人世も意義ある
ものとなるべきには候はずや
抗すべからざる運命の力は、小生を
貴兄の傍より遠く運び去り申候
新奇なる状態の下に強き
刺戟の下に生活する小生は事実上
深く貴兄を思い、貴兄と共に語る
機会を有せず候へとも、一度其生
活に変化を受けし時、或いは繁多
なる刺戟より脱し、束縛より離れ
自由の境地に思いを走らし得る時に
猛然情緒を刺すものは
異境にある友の思い出でに非ず
して何に候べきべし、皎々たる月の
下、或いは森々たる林の下に星影一つ
何等かの暗示に輝くを見つむる時、我は
深き思い出でにふけり申候。

拝啓
この頃は、天候が定まらず、
気持ちの良くない時期ではありますが、貴兄には
おそろくお元気に、いつものようにご活躍
なさっていることと、ご推察申し上げます。小生（私）は
相変らず元気に、遊びほうけております。
いつかお訪ねし、親しく
お話をしたいと思ひながらも
始終、ご無沙汰してしまつたこと、誠に
申し訳なく、ひたすら貴兄の
ご寛容を願する次第です。
この度も遂にその機会を得ないまま
またまた、上京の日も近づいてまいり
言い訳かたがた、手紙を差し上げる次第で
す。
共に話をし、共に語つたのも、思えば、はや
一年半の昔になつてしまひました。思うに
小学校の友と申して、また中学校の友と言つても
すべて衆人（万人）、世の行路を進む
旅人の様な奇しき（不思議な）縁によつてめぐり逢うもので
それぞれ運命が異なることも
また、その目的が同じではないことに従つて
それぞれに分かれ、東に西に
北に南に、そして遂には過去の
追憶の外に、何等残るものもない（境地に）
至るべきものかもしれません。
その通り、五尺の肉體は、万人それぞれ
異なる境遇・運命に支配されて
萬里の遠くに隔てられるのは、
まことに、どうすることもできないこと
ではあるけれども、人間の精神的な半面は、
決して決して、そのような事情で
全く支配し盡されるものではありません。
冷酷なる境遇の鉄槌も
無情なる運命の腕（かいな）も
肉體を離れた靈の上では、何等のオーソリチー（權威や威信）
に値（あた）いするものではない。
かくして、千差萬別の境遇の
下（もと）にある人々をもつて、強い國
に結束させ、たとえ一日・半日の友であつても
深き永久の、精神の交わりを続けてこそ
ここにおいて人生も意義ある
ものになるといふものではないでしょうか。
抗うことのできない運命の力は、小生を
貴兄の傍より遠く運び去つてしまひました。
新奇（目新しく、普通ではない）なる状態の下（もと）で
刺戟ある生活をおくつてゐる小生は、事実
深く貴兄を思い、貴兄と共に語る
機会を持つことができずとも、一度その
生活が変化した時、或いは多くの
刺戟より脱し、束縛より離れ
自由の境地に思いを走らせることが可能である時に
激しく情緒の奥に突き立てるものは
異境（米沢）にいる友の思い出でに非ずして
何がありましようか。皓々たる月の下
或いは、森々たる林の下に、星影一つ
何等かの暗示に輝くを見つめる時、小生は
深き思い出でにふけてしまふのです。

激しい競争の裡に心神の疲労
せし者にとりかゝる瞬時の自由の天地
も限りなく愉快にして又偉大なる
愈安と成る事に御座候。
しかも周囲の状態は忽にして此
連想や回想の糸を断ち切り
現実の中に巻き込み候へしかば
嘗て一度も兄の許に通ぜし事も
候はざりき、されど思ふに
兄も何等かの折りにふれては数な
らぬものには候へども、回想の一部に
小生を容れ下さる事あるを信じて
疑はざるものに御座候。
かくして数百里の遠きに異る
境遇の下にありても心と心とは
相通い相走りて、靈の交わりをな
す事に候べければ、是幾多の面友に
優る事萬々、実にこれをしも
心友と稱するに候はずや
君の近況は少しも知り申さず候へども
偉大なる理想の下に努力せられ
つゝ、あるを信じ申候。嘗て一日
兄が禅に修養せられつゝ、あるを
聞き、あゝ、実に君にして此事ありと感じ
申候。是兄の心情の余香には
候はずや、兄の人格の余韻には
候はずや、小生は益々兄の努力の
偉大なるを想見した次第に御座候
思うに人生の幸福は理想に
向いて一歩ずつ近づく努力の
生活に候ならむ、目的を成就し
たる上に於いて其目的の大小或いは価値の
上下によりて其生活の意義の定まる
ものには候はずして、是れに努力しつゝ、
ある一歩々の生活に意義あるもの
と思はれ申候。然らずんば不幸
中道に倒れし人の価値は、如何に
して定むべき、実に人世は其努力
力（勿論高き理想と合致すべき）
の如何によりて価値を定むべき
ものに候べし、故に兄と小生と
其立場は異なるとも主観的努力の
価値は二つなきものと思はれ申候
小生とて、決して決して、所謂都の弊風
に染みて無益の生活をなすものには候はず
何にせよこれを成就せむが益には
多大なる努力と奮闘を要すべき
ものに候。前途は遙遠なり
共に、奮闘努力、郷里の為
母校の為、他日の成功を期すべき
には候はずや
紛々たる世論は大なる理想の下には
一顧の價も有せざるべきものに候
兄も閑暇の折はお便り被下度お願い
申上候。
廿一日
早々不一
榮
吉馬兄

激しい競争のうちに、精神を疲労
した者に訪れる瞬時の自由の天地も
限りなく心樂しく（気持ち晴れ）、また偉大なる
やすらぎになることである。
しかし、周囲の状態はたちまちにして
この連想や回想の糸を断ち切り
現実の中に引き戻してしまつたため
かつて一度も貴兄の元に伺うことも
できなかった。しかし、思うに
貴兄も何かの折りにふれて、
多くはないと思うものの、思い出の一部に
小生を（私を）入れてくださったことを信じて
疑われないのです。
そのようにして、数百里の遠方に
異なる境遇の下にあつても、心と心とは
通じ合い、疾走し、魂の交わりが
あれば、これは多くの友人に
優る事萬々です。実にこれを
心友と呼ぶのではないのでしょうか。
貴兄の近況は、少しも知らないのですが、
偉大なる理想をもつて、努力されて
いることを信じてゐる。かつて一日
貴兄が禅の修養をされてゐると
聞き、あゝ、実に貴兄にして、此の事ありと
感じいつた次第です。これは貴兄の心情の余香（残り香）
ではないか。貴兄の人格の余韻（余情・風情）
ではないか。小生は益々、貴兄の努力の
偉大なるを想見した次第です。
思うに人生の幸福は理想に
向かつて、一歩ずつ近づく努力の
営みでしよう。目的を成就
すれば、その目的の大小、あるいは価値の
上下によつて、その生活の意義が定まる
ものではなく、そのために努力を重ねた
生活に意義があるものと思はれるのです。
そうであれば、不幸にも
道半ばに倒れた人の価値は、いかに
定まるべきでしょうか。まことに人世はその努力
（勿論高き理想と合致すべきであるが）
の如何によつて、価値を定めるべきなの
です。故に貴兄と小生と
其の立場は異なつていようと、主観的努力の
価値は二つとないものと思はれます。
小生とて、決して決して、いわゆる都の弊風（悪習）
に染まつて、無益な生活をおくつてはいない。
何にせよ、目的を成就するためには
多大な努力と奮闘を要するものです。
前途は、遙かに遠いものです。
共に共に、奮闘努力、郷里（米沢）のため
母校（米沢中學校、現山形県立米沢西館高等學校）のため、いつの日かの成功を
期すべきではないでしょうか。
微細な世論は、大きな理想の下では
一顧の値（わずかに心に留める価値）ももたないのです。
貴兄も暇（いとま）がある折には、お便りをくださるよう
お願い申し上げる次第です。
三十一日（大正4年8月31日）
早々不一
（我妻）榮
（本田）吉馬 様
二伸
小生は、五日頃上京する予定であるので、
おついで折りは、お訪ね下されたく存じます。



◇親友本田吉馬氏 略歴

大正14. 6. 1～昭和21.10.15 窪田村議会議員
 昭和20.12. 1～昭和21.10.15 窪田村村長
 昭和30. 4.30～昭和46. 4.30 米沢市議会議員
 昭和34. 5.16～昭和36. 5.12 米沢市議会副議長
 昭和43.11.30～昭和46. 4.30 米沢市議会議長（38代39代）
 昭和46.11.23 米沢市功績者 功績章受賞

（その他）

財団法人中田協和会長
 米沢バイパス促進連絡協議会長
 米沢福島間電化促進期成同盟会参与 等の要職
 水利の確保、松川護岸工事、鬼面川改修工事の
 再開等公共施設の充実と地域住民の福祉の向上
 等、広く市政各般に寄与された

（米沢市調べ）

◇親友としての交友を物語るエピソード

①中学5年の時 夏休みに二人で徒歩旅行5泊6日の旅
 コースは米沢→山形（吉馬恩師宅）→宮城県川崎町
 （小学校の体育館）→宮城県大河原町（榮親戚宅）→
 福島県原釜（漁夫民宿2泊、船に乗り魚釣り）→霊山
 神社を経て帰宅・・・生涯の思い出に残る出来事

②当時、学校は藩校精神が遠のいた、進学率
 が悪いなどの批判を受けるようになり、学
 生同士から校風刷新が叫ばれ出した。5年
 生の時、榮が筆頭、吉馬が副格で風紀刷新
 宣言文起草委員となり、放課後十数名で熟
 議を重ね、校風刷新に取り組む。

③老年時代 上杉鷹山公米沢入部200年（昭和45年 1970）に当たる年に、米沢郵便局が記念に鷹徳貯金の
 募集を企画。その記念品とするため、局長と貯金課長から本田吉馬氏に名誉市民我妻榮先生から色紙を書い
 てもらうように頼んでもらえないかと嘆願された。揮毫嫌いの事を知る吉馬氏は用件を伝えず湯河原の別邸
 を訪ね榮氏に懇請、榮氏は君に来られたら断れないな一言の下に快諾された。揮毫「順流治水」は今に
 残る・・・生涯の友として交友が続いた。

